オプション教材（きょうざい）クリ　暗唱長文集（あんしょうちょうぶんしゅう）

●暗唱の手順　１日分

・１日目は、まず、1の文章を３０回音読します。最初の数回はゆっくり正確に「てにをは」などを間違えないように読みます。
　正確に読めるようになったら、ある程度早口で棒読みで、句読点などであまり息継ぎをせずに読んでいきます。
　イスにきちんと座って読むと読みにくい場合は、歩き回りながら読んでもかまいません。
　お母さんやお父さんは、読み方の注意などは一切せずにただ優しく褒めるだけにしてください。
　１５回ぐらいでもう空で言えるようになることが多いと思いますが、できるだけ３０回続けて読んでください。
　なぜ回数を決めて繰り返すかというと、「覚えられたらよい」という目標でやっていると、暗唱の教材が難しくなったときに、「難しいからできなくなった」ということになりがちだからです。「決まった回数を繰り返す」という目標でやっていると、難しい教材になっても同じように暗唱ができます。
　３０回音読しても暗唱できない場合は、もう１０回音読してください。
　これでその1の文章が暗唱できるようになります。
　それでもできない場合は、暗唱の自習はいったん終了してかまいません。また機会を見てやっていきましょう。

●暗唱が難しいときは

　暗唱のような短い時間の学習は、夕方にやろうとすると忘れてしまうことがあります。また、毎日同じようにやらないとできるようになりません。できるだけ、朝ご飯の前などに、家族のいる中でやるようにしましょう。
　そして、暗唱を毎日やるのが難しい場合は、暗唱の自習はせずに、読書の方に力を入れていってください。

●暗唱の手順　１週間分

・１日目に、1の文章を暗唱できるようにします。
・２日目は、2の文章だけを同じように３０回音読し、暗唱できるようにしておきます。
・３日目は、3の文章だけを同じように３０回音読し、暗唱できるようにしておきます。
・４日めは、1、2、3の全部通して、１０回音読します。すぐに暗唱できなくてもかまいません。
・５日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。
・６日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。
・７日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。すると、1から3の全部の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の手順　１か月分

・１週目に、1から3の文章を暗唱できるようにします。
・２週目は、もう1から3はやらずに、今度は4から6の文章を暗唱します。
・３週目は、同じように、7から9の文章を暗唱します。
・４週目は、1から9の文章を全部通して、毎日４回ずつ音読します。
・すると、１か月で1から9の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の活用

・暗唱のコツをつかむと、自分の好きな本の１部を暗唱したり、英語の教科書を暗唱したりできるようになります。また、覚えるつもりがなくても、物事が頭に入りやすくなります。

●より詳しい説明は

　より詳しい暗唱の仕方は、「暗唱の手引」（http://www.mori7.net/mori/mori/annsyou.html）をごらんください。

暗唱長文 小２ 10月　　十五個のお団子

1「今日は十五夜だから、お団子作ろうか。」
朝ごはんのあとで、お母さんが言いました。私は、大きな声で、
「うん、作ろう。作ろう。」
と騒ぎました。お母さんは、にっこりしながら、
「じゃあ、材料用意しておくから、今日は遊ぶ約束をしないでね。」
と言いました。

2 私は、小さいころから何回もお団子を作ったことがあります。私はお団子作りが大好きです。これた生地を手の平でころころと丸めます。まるで粘土遊びのようです。粘土と違うのは、お団子の方がおいしそうな匂いがするところです。3お母さんはゆでてからでないと食べられないと言うのですが、いつも、こっそり一口だけかじってみたくなります。

家に帰ると、すぐにお団子作りに取りかかりました。お母さんが用意してくれていたお団子の粉と水を混ぜます。

4「ゆっくり混ぜないと、はねるから気をつけて。」
と注意されたので、なるべく丁寧に気をつけてかき混ぜました。だんだん粘土のようにまとまってきました。お母さんは、
「どれどれ、ちょっと見せて。」
と、少しつまむと、
「耳たぶくらいの柔らかさになったかな。5うん、いいんじゃない。もう丸めていいよ。」
と言いました。そんなときのお母さんは、てきぱきしていて、まるで学校の先生のようだなと思います。生地をむにゅっと取って、ピンポン玉くらいの大きさに丸めていきます。お供えにするのは十五個です。6残りは、お母さんと私のおやつになります。十五個までは同じ大きさになるように、丁寧に丸めました。
「やった。十五個できた！」
丸め終わったお団子をよく見てみると、大きさもまちまちだし、形もまん丸ではありません。7丁寧に作ったはずなのに、おかしいなあと心の中で思いました。そんな私の気持ちがわかったのか、お母さんは、
「上手にできたね。お母さんが子どものころは、こんなに上手に丸められなかったよ。お月様も喜んでくれるね。」
と言ってくれました。8ゆで上がったお団子は、もっちりしていてとてもおいしそうでした。

十五夜では、お団子は十五個お供えするのだそうです。中秋の名月というのは、昔の暦で八月十五日のお月様のことをいうのだと
お母さんが教えてくれました。9十五日だから十五個お供えするのかなと心の中で思いました。十五個のお団子を、まるでピラミッドのように重ねて、窓のそばに置きました。まん丸なお月様が嬉しそうにこちらを見ているような気がしました。0

（言葉の森長文作成委員会　©）

暗唱長文 小２ 11月　　一位になったリレー

1「リレーの選手は、そろそろ入場門に行きましょう。」
大内先生の大きな声が聞こえました。その声を聞いたぼくは、急に心臓がどきどきしてきました。ぼくは今年、リレー選手になれたのです。そわそわしながら入場門まで全速力で走りました。
2 入場門に着くと、六年生の太一君からゼッケンを渡されました。ぼくのグループは、青いゼッケンです。太一君にゼッケンをつけてもらっていると、いつのまにかお母さんが隣に来ていました。
「ゼッケンつけると、さすがにリレー選手って感じがするね。がんばって。」
と言いました。3ぼくは少し照れくさくなりました。
いよいよ入場です。入場の音楽が流れてきたら、不思議なことに緊張はどこかへ飛んでいってしまいました。体も軽く、いつもより速く走れそうな気がしてきます。
ピストルの音で一年生がスタートしました。4トラックを一周します。ぼくは身を乗り出して一年生を応援しました。練習のときは、いつも二位でバトンをもらっていました。今日はどうだろうと気になって仕方ありません。
今度は、いつものように二位だけれど、一位の子とあまり差がないようです。5ぼくは、絶対に一位になりたいと思い、バトンを受け取りました。
赤のゼッケンは、すぐ目の前にいます。すぐにでも追い越せそうな気がしました。ぼくの周りを歓声が包んでいます。ぼくは、走るのに夢中で、応援団の声もお母さんたちの声も、はっきりと聞こえませんでした。6直線でぼくは一気に赤を抜きました。あっという間の出来事でした。

「やった！　抜かしたぞ！」
心の中で叫びました。目の前を誰も走っていないのは、なんて気持ちがいいのだろうと思いました。7そのまま一位でバトンを渡しました。太一君がぼくに飛びついてきて、
「やったな、やったな」
と頭をくるくるとなでました。ぼくは、まるでホームランを打った野球選手のようだと思いました。
8ぼくたちのグループは、そのあと二位になったり一位になったりを繰り返していましたが、アンカーの太一君には、三位でバトンが渡りました。太一君は、バトンを受け取ると、ひゅうっと風を切るように走り出しました。9すぐに白を抜いて二位です。ぼくは必死で応援しました。最後のコーナーで、ついに赤も抜きました。一位でゴールに入ってきた太一君は、とてもかっこうよくて、ぼくは太一君みたいになりたいと思いました。0

（言葉の森長文作成委員会　©）

暗唱長文 小２ 12月　　昼休みのサッカー

1 今日のお昼休みに、さとし君が、
「サッカーしたい人、集まれ。」
と言ったので、ぼくは、
「はあい。」
と、手を上げながら、さとし君のところに行きました。ゆうや君もたけし君も、
「僕も、僕も。」
と言って、やって来ました。2 それを見ていた、ほかの友達も集まって来ました。ちょうど十人集まったので、五人ずつに分かれてチームを作りました。
「さあ、急いで校庭に行こう。」
と、僕が声をかけると、ゆうや君が、
「うん、早く行かないと六年生に場所を取られちゃうよ。」
と、大きな声で言いました。
3 運よく、サッカーコートは空いていました。いよいよ試合開始です。僕は、キーパーになりました。どんなボールが飛んできても、絶対に止めてやるぞと思いました。相手チームには、地元のサッカーチームで活躍しているはやと君や体の大きいまさたか君がいます。
4 早速、はやと君がシュートをしてきました。ものすごい勢いでボールが飛んできます。
「けんと、止めろよ。」
誰かの声が聞こえました。ぼくは、心の中で、
「ヨッシャー。」
と叫び、ボールに飛びつきました。一瞬、はやと君のがっかりした顔が目に映りました。

5 たけし君が、
「けんと、よくやった。」
と、声をかけてくれたので、僕は、
「おお。」
と、手を上げました。
そのあとも何度かボールが飛んできましたが、僕は、必死でボールを止めました。どちらのチームも、なかなか点が入りません。6 このまま引き分けで終わるかなと思っていたときです。少し遠くにいたまさたか君がいきなりシュートをしてきました。ボールは、ゴールに向かって、一直線に飛んできます。僕は、あわててボールに飛びつこうとしました。7 指の先がボールに触れたのがわかりました。でも、そのあと、ボールは、すっぽりゴールにおさまってしまいました。相手チームから歓声が上がりました。
ゆうや君が、
「けんと、ドンマイ。大丈夫だよ。僕が絶対に点を入れるから。負けてたまるか。」
と、真剣な顔で言いました。8 僕は、まるで、ワールドカップの決勝戦に出場しているような気分になってきました。そのあと、ゆうや君は、パスされたボールを、見事な足さばきでゴール近くまで運び、ゴールの右端をねらってシュートしました。9 相手チームのキーパーは、手も足も出ません。見事なゴールでした。
そのとき、お昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴りました。ゆうや君が、
「勝負は、明日に持ち越しだな。」
とつぶやきました。僕たちは、急いで教室に向かいました。0

（言葉の森長文作成委員会　N）